

鉱山旧記と鉱山絵図による近世鉱山の 比較史的研究

弘前大学人文学部 教授 長谷川 成一

I. 研究の目的

近世初頭、わが国では世界的にも注目された金銀の生産量を誇る各鉱山が開発され、幕藩制国家の成立はそれらの富の蓄積のうえになされたといってもよからう。したがって幕藩領主権力は、このような金銀鉱山の掌握につとめたが、当該鉱山の開発と技術の発達、中世から近世への社会変革に多大の影響を与えた。

また鎖国体制下でもわが国の銅鉛は世界的にも有数の生産量を誇り、海外貿易にも銅は決済手段として重要な地位を占めていた。このように金・銀・銅・鉛の非鉄金属を生産する近世鉱山の研究は、近世国家の特質を考察するうえでまことに重要な意義をもつものであると同時に、鉱山の開発や技術の発達の視点から、本研究は近世の非鉄金属鉱山を多面的に研究しようという目的をもつものである。

II. 研究の経過

研究計画に基づき、下記のような経過で研究を実施した。

1. 基本資料の収集

① 鉱山旧記類の収集：

日本鉱業史料集刊行委員会から刊行されている『日本鉱業史料集』の、第1～14期にわたる国内の主要な近世鉱山の旧記類を購入した。佐渡・生野・阿仁・尾去沢・院内・大森・尾太・多田など、本研究のテーマに関係する近世鉱山の旧記類の収集は、刊行物に関しては終了した。

② 北日本の正保国絵図の収集：

出羽一國絵図（秋田県公文書館蔵）

陸奥津軽郡之絵図（青森県立郷土館蔵）

南部領内絵図（盛岡中央公民館蔵）

上記の正保国絵図を、撮影するか、ネガフィルムからプリントした。これによ

り国絵図に描かれている初期鉱山の実態把握が可能になった。

- ③青森県史編さん室の収集絵図，ならびに早稲田大学教育学部教授佐々木研究室に保管されている鉱山研究会が収集した，鉱山関係の屏風絵，絵図類の，旧記類の写真を用いてプリントした。さらにフィルムスキャナーでコンピュータに取り込み，画像の解析を容易にした。

2. フィールドワークの実施

17世紀北日本で最大の金山であった陸奥国鹿角の白根金山，18世紀北日本で最大の銅山であった陸奥国鹿角の尾去沢銅山の現地踏査を実施した。

3. 近世鉱山関係資料の収集

- ①盛岡中央公民館所蔵の「盛岡藩雑書」から，17～18世紀にかけての盛岡藩領内の鉱山関係資料を抽出した。約5,000件ほどの鉱山関係記事を収集した。
- ②近世の石見国大森銀山で用いられていた鉱山用語を集めた「山言葉」など，大森銀山関係資料をコピーで収集した。

Ⅲ. 研究の成果

本研究では，下記のような成果を得ることができた。

(1) 鉱山旧記類のなかでも，陸奥国尾太鉱山の「山機録」や「弘前藩庁日記」などの分析を基に，次の論文を発表した。長谷川成一「陸奥国尾太鉱山に関する一知見」(『日本歴史』第600号，1998年5月)。

(2) 北日本の正保国絵図を収集することで，当時のわが国でも有数の非鉄金属の鉱山地帯であった，北日本の鉱山群の分布，鉱山の稼行状況，鉱山町の配置などが判明した。さらに国絵図に描かれる鉱山の独特の景観，鉱山を取り巻く環境(道路や河川などの整備，現在でいえばインフラの状況)も総合的に把握することができた。

(3) 秋田県加護山精錬所の「加護山鉱山全図并製鉱之図」，岩手県金沢鉱山の「金沢御山盛之図」，秋田県尾去沢鉱山の「尾去沢銅山図屏風」の絵画資料を収集したことにより，当時の鉱山の景観，鉱山社会のあり方，鉱山で働き生活する民衆の姿が総合的に把握され，特に鉱山における女性や子どもの労働，遊びなど従来の研究では見過ごされてきた人々の歴史的な位置づけを試みる事が可能となった。そこで，鉱山における女性労働と子どもについて，次のような見通しを述べることにしたい。

【鉱山絵画のなかの女性労働と子ども】

近年，女性史の研究が盛行をみせており，なかでも女性史総合研究会編『日本女性史』(東京大学出版会，1982年)や同編『日本女性生活史』(東京大学出版会，19

90年), 近年では大口勇次郎『女性のいる近世』(勁草書房, 1995年)においては, 近世の女性について多角的に論じられている。女性の労働についても町場の下女奉公や農作業のあり方などから, 言及がみられるものの, 対象とした労働はあくまでも町場と農村女性のそれである。鉱山労働についてはほとんどみかけないのが現状である。このたびの研究成果の一端として, 鉱山社会における女性労働の状況について簡単に触れてみたい。

「金沢御山盛之図」(岩手県立博物館蔵)によれば, 当然のように鉱山の坑内には堀子たちの労働の姿が数多く描かれている。しかし採鉱や排水, 坑内の採石の運搬, 坑道の開削など, 坑内作業には女性が描かれた形跡がない。「尾去沢銅山図屏風」(個人蔵)や「金沢御山盛之図」によれば, 女性たちは坑外で碎石, 選鉱, 製錬の作業に従事していたようである。「加護山鉱山全図并製鉱之図」(『町史資料 加護山製錬所』秋田県二つ井町, 1995年)によれば, 碎石と選鉱には男性の姿がなく, この作業は主として女性の受け持ちとされていたと考えられる。「金沢御山盛之図」でもほぼ同様である。

製錬に関しては, 「加護山鉱山全図并製鉱之図」によれば, 南蛮吹の床(金属を溶かす炉)を描いたか所でふいごを押す作業を女性が担当しており, 熔解し金属にする灼熱の製錬作業自体を行う現場には男性が描かれており女性の姿はない。これは体力や危険性を考慮してのことで, 女性の労働ではなかったようである。

周知のように鉱山労働は総じて過酷であり, それに従事する人々には強靱な体力が必要とされた。しかし分業の過程では, 坑内作業は男性が, 坑外の碎石, 選鉱作業は女性が, 製錬作業でもふいご押しなど床の外部の作業は, 女性が受け持つという分業体制が形成されていたといえよう。以上のような労働の分担のあり方は, 文献資料ではほとんどみかけることがなく, 鉱山の屏風絵や鉱山絵巻・鉱山絵画などによって判明したことであり, ビジュアルな資料から鉱山社会のあり方, 鉱山労働の分業体制の一端が明確になったものと考ええる。

なお「加護山鉱山全図并製鉱之図」に描かれている作業中の女性たちのなかには, もろ肌脱ぎの女性が何人かおり, かなり肉感的に描写していることも特徴であろう。秋田蘭画の画風の影響を受けているのではないかともいわれている。また南蛮吹きで出た滓を石臼で細かく碎き^{ゆりもの}汰物にする作業場では, 小さい子どもが母親とおぼしき女性の周りで莫産を敷いて遊んでおり, もうひとりの女性は作業を中断して胸をはだけ乳房を出して子どもに授乳しようとしているようにみえる。

さらに比重選鉱を行う^{ざるば}炭場の図では, 子どもが作業中の女性に話しかけており, このように危険の少ない作業場には母親に連れ添った子どもが自由に出入りでき, 彼らの遊び場でもあったようである。「尾去沢銅山図屏風」には, 母親の水汲みを手伝う子どもが描かれているが, いずれにしても子どもたちが鉱山労働に使役され

ている姿は確認できなかった。また子どもは男女を問わず例外なく赤い着物ないしは腹巻き、チャンチャンコなどを着ている点が特徴であり、ひときわ目立つ存在である。制作者が絵画全体のなかで、子どもを際立たせようとしているのではないかとも思われるが、その理由や意図については他に研究が見当たらず判然としない。

IV. 今後の課題

当初の研究計画に盛り込んだ史資料の収集作業は、関係機関や各位の厚いご協力を得て、終了した。

今後、収集した膨大な史資料の整理と分析をいかに効率的に実施するかが問題であり、具体的には、次のような課題が挙げられよう。

- ①フィルムスキャナーでコンピュータに取り込んだ、各鉱山の絵図類、旧記類に収められている作業図、景観図、屏風絵のなかの注目される図の写真類を、データベース化する。
- ②正保の国絵図に描かれている鉱山景観、鉱山町、稼行中の鉱山、鉱山をめぐるインフラなど、国絵図から北日本における非鉄金属鉱山の状況を総合的に把握する。
- ③「盛岡藩雑書」の鉱山関係記事を早急に整理してデータベース化し、17～18世紀にかけての盛岡藩の鉱山政策の特質を総合的に把握する。さらに当時の秋田藩、弘前藩、鶴岡藩、山形藩、米沢藩、由利郡内の諸藩の領内鉱山についても、所在と分布を確実に把握する。